文藝論の續り（ツヅケテ）乃ち便箋論の次 組版あと

3

文學上の形式論

我が社會の子、不熟成なるものの少なからぬ如く、文學のごときは、恐らくその最も幼稚なるもの、一ならむ。我が文界は今尚ほ過渡の時代にありと云はざるべからず。從來の和漢文學乃ち其個和に成りし文學を總括して称ふ國文學なる名に好なしとするも、未だ其國文なるものは世界の最も進歩せる偉大なる文學に見らるべの朋輩たる作と相比すべきものを有すと云ふを得ず。固より或は飜譯に、或は解說に、或は神話に、或は詩歌に陶冶すべきものなきにあらず。又その各々一種特別の美を具するあるを否むにあらずと雖も、未だ以て世界の大文學と稱するには足らざるなり。こは多くの論者の既にしばしば言ひ以て我が文學をして將來に大成を期せしめんと欲したる所なるが、意にその妙く朋輩たるに乏しきの憾あるのみならず、文章に用ふる言語の形に於いても大に無人きして不備を感ぜしむるものあり。蓋しは我が文學の發揮する想の傳達妙なりを云はず、又全脳力の想と形とは如何なる關係を有するものなるかをも論ぜず、性質を偖あるの機圏たる文章の形式に於いて甚しく不完全なる所あるを云はん

論文　文學上の形式

早稲田大學出版部原稿紙

と紹す。我が文学は未だ過渡の時代にあり、予輩の云ふ所以のもの、主として此一点改良を要する所あればなり。無怠の改革は固文学を毀ちてそすれ、之を発達せしむるの利なきは勿論のことなれど、文学の状態今日の如きは止むを得ざるに出づるものにあらず。

改良を敢てするの志氣はまた一日も弛ましむべからず。今の所謂文学者の多くは、立来の文脈を遵守する文章にあらずは雅ならず美ならずと思惟ある保守的習慣に束縛せらるゝ所はなきか。彼等は美文なるものに関する一種の迷信に絆さるゝ所はなきか。

曾て羅馬字會の設立され言文一致の唱へられる時に比すれば今日の文界は大に保守に傾けりと云ふも不可なからん。今の文学者は、曾て羅馬字雑誌なるものゝ発兌されしを思うては、或は之を嘲ひ、言文一致体の廃れたるを見て、恐らくは其失敗を再びするの意なからん。惟ふに、曾て試みられし言文一致脈は其人を満足せしむるものにあらず、又羅馬字雑誌の如きも或は嘲ふべきものならんと雖も、是と共に此等改良業の由りて起りし原因をも埋没すべきにあらず。予輩は此頃風聞に一傳言録の世に假名の汉字みは新假名の製作を試みら

早稲田大學出版部原稿紙

れんとするを聞き、大に其志を壯とするものなり。曩日学会の時代は已に一旦過ぎ去れりとするも、其の如き計畫を喚起したりし原因の存する間は、必ずや再び革新改造の呼び聲の聞ゆるとあらん。

標準を中古文に取りたる文体を以て今日の文章を規定せんとするが如きは、或は多少一時の乱雑を除くの利はあらんも、我が國文学千百年の後に亘るべき大計とは言ふを可らず。固より只だ一時の需用に應ずるの策を立つるも全く非なるにはあらず、然れども之に執着して將来の大計を過るは最も憂ふべきことなす。

然るに一時の策をば唯一時の策とはせずして永久之を固執せむとする者決して尠きにあらず。是れ豈に国文学大厦の発達を大觀したる者と云ふべけんや。今日の文学者は須らく深く我が文学の現状を考へ其將来を慮りて殆に大に関係し、紫式部若くは菓子若しは馬琴の墨を磨するとを以て其一生の榮となすの心を抛つべし。予輩は今假りに今日慣用の文脈を以て此文を草すれ共、是れ素と予輩の意志に出でず。此文を草するに用ふる文脈は過渡時代のものとして其の遂に廃れゆかんことを是れ寧ろ予輩の願望なり。予は此文脈が当に我が国文

早稲田大學出版部原稿紙

4

別行、

学の取るべき文辞たることを信じてて、以て之を用ゐることを能はざるなり。

文学の想に対する形と云へば、其意識に漠然たるものあり、予輩の上に文章に用ゐる言語の形又は文章の形式と云ひしは畢竟詩文の辞を指せるなり、而して辞と云ふもて、はは唯だ言語上のものを指せるなり。即ち我が国詩国文は如何なる言語及形式を以て標準となすべきか、是れ予輩が当今の文学者に訴へて其注意を催さんと欲する所の問題なり。

此頃上田萬年氏が帝国文学に標準語を論ぜられたるあり、是れ我国の語学者は云ふに及ばず、文学者も亦深く注意すべき所とす。在来の所謂美文又は之に似寄りたるもの、範囲に於いて文章家たらんの名誉を得んと力めば、恐くは甚だ我が文学史上に遺す程のものは為し難からん。おら人も、是れ果して今日の文学者たらんものゝ大志願となすべき所なるか。

不肖は然らずと考ふ。華乃(註)特来の文学の為に標準を立め、此標準語を以て文章を作ることに力あるべし。是れ我が国文学永久の発達を慮る者の取るべき道にあらずや。固より我国に於いて見るかゝる所謂文章語と日常の言語とが甚しく隔離したる点、又日常の言語に於いても甚しき差別を生ずる数多の方言の併立する

早稲田大学出版部原稿紙

愛に立りては、標準語を定めむを容易の業にあらず。惟ふに市井一生の間に其成功を見んを難かるべし。然れども今日言語醇雅及文章の取るべき方針はまさにていにありと考ふ。

文字の改良者しは製作の如きは難事中の難事なるを固のり論なき所なれど、是れ亦決して我國に立りては忘却すべき問題にあらず。仮名と漢字とはその補助に於りて全く異別のものなる、言ふを待たず。之を学ぶに消費する時日と労力、又之を併用するより起る種々の煩しきは枚もあれども言ふを要せず。漢字を記したる上に之に仮名を振るの必要に迫まらるゝことありとは、何ぞ不便の甚だしやの。

又は同一思想を伝ふるに二種の文字を以てするものなり、文字の不都合もて、に至りて極まりつくしたりつべし。市井は今日の文字加減か文学の発達に伴隨して改良すべき者なるやを疑ふ。併しながら文字の改良は口に言ふを容れ口之を実に行ふとの至難なるものなれば、市井は今暫く之に対する考案を呈出するとせば、不當が文学上の好材料となしてゝ、論ぜむと欲する所は寧ろ国詩の形式、或と散文の文脈とにあり。国詩は大詩人を待つて始めて其形体の定まるべく、

早稲田大学出版部原稿紙

散文は大文章家の出でゝ始めて其文脈の確立すべく、唯だ一片の議論の能くも
を制定すべきにあらずと雖も、多かの議論は又おのづから大詩人大文章家をして
其取るべきの行路を発見せしむるに過ぎなしと云ふべからず。豈に之を
論ずるの必要なしと云ふべけんや。

方今我が国詩のまさに大発達を要すべき状態にあるとは殊更てゝ云はずして
明らか。和歌といひ、俳諧といひ、俗歌といひ、皆その特別の妙趣なきにあ
らず。其の概して短きの故を以て其妙味を没すべきにあらず。短句には短句の
妙處あり。一俳句にして能く数十百言に倍する第乃数十百言の表出し得ざる妙
味を含蓄するものあり。然れども五来の詩形が千種萬態の感想を言い表わすに
便ならず、雄篇大作を生ずるに適せざるとは、夙に識者の見るところ、新脈活
なるもの、興起せしも亦此が故に外ならず。新脈詩は未だ其人の望む程の発達
を為さずと雖も、新活人の当に試みるべき所はてゝにありと云ふべきなり。新
脈詩も其発生の時よりして一特二特三四特し来りて、今日は頗る見るべきもの
なきにあらず、既に我が文学に於て[illegible]可なる根據を示したりと云うて可なり。

早稲田大学出版部原稿紙

今日の新詩は昔日にまさりて長篇の出づるあるを見る、而して其言辞も亦甚しく蕪雑ならず。強ちその長篇なるの故を以て貴ぶべしと云ふにはあらざれど、更に角之を以て新詩史に於ける一進歩又一兆候と見るは不可なからん。予輩は一時盛なりし新詩のほとゝど其跡を隠くして之に代りて和歌の頻らに持て囃されしをあるを見て論じて、今日の時を和歌の一中興の期と云ふべくば復に遠からずして新詩の時期と名づくべきものゝ来らんことを豫言し得べし、予輩の他日大に興起せんことを希望する新詩の時代には若し今日の和歌の中興期として全く無知のものならしめば少くとも言辞の蕪雑ならざるに於いては過去に優る所あらん、惟ふに羽米の国詩に一大光輝を添へんものは新詩の更に勃起し来り歩を進げたるものなるべし、予輩は一時沮喪せむとする新詩の更に勃起し来らん日あるを望み又遠からずして其日の来らんことを信ずと云ひしをあらしが、其後同誌第壱号の九月に刊行せられ早くも其時の形勢は一変して復たゝび新詩の盛に起らんとするを見る。是れ当に怨むべき事なり。且又一時和歌の盛なりし痕跡として三十一文字よりも高くその陸奥時以前に唱して世間の注意を引く。是

早稲田大学出版部原稿紙

れ、寧ろ喜ぶべき事なり。それは従来の短歌、長歌も、(種)の国詩の範として、保存すべきものなるは論なければなり。且一時所謂国文学(附けて和歌)の勢威しかりし結果として今日の形骸は幸に言辞の無雑なりおるてとに於いては昔日のものに優れる所あり。是れ一般の進歩と見て可ならん。然れども文法論稚てて整いたれ、又中には言詞の古雅に、句調の流暢なるものてあれ、その言語は甚感想に真実の活趣なきもの極めて多し。特に今日の所謂学歌に於いて此弊を見る。此弊は、一言に云へば、言語のなんらかなるに拘りて生気を失するにあり。予は一枚用紙上に我が征清軍の大勝利を祝する阿房陀羅経を見て、今日のなべての軍歌のうち此阿房陀羅経のかた生気ありと思いたり。活歌の言辞は素より活潑と全くは同一なる可らず、寧ろ多少古雅なるを要するの趣あれど、然れども又今一層当世の活言語の中より其生気を得来らざる可らず。此れほどの事は、予輩は形骸詩の言語に就いて望むの權理あり。而し実際如何なる言語を用いて新生面を開くべきかは、詩人を待つて俟めて解釈さるべき問題なり。

早稲田大学出版部原稿紙

9

8

9

然り解釈は望むべき言語の形式に就いては今のしく素人の云い得べきとあり。然り解釈の最も避くべき所は、今様なりの変化なくして、讀む者を容易く倦ましむるの一事なり。節々切る如きは即ち式辭を採は人一方便にして、是れ今日所謂の解釈の陥く因する所なるが、此の言辞の配置及語尾（殊に句尾）の調べ方の如きも亦此辭を叙述の道となるべし。多くの新解釈が其言辞に詳述を欠く所以のものは、其言詞の配置及句尾の如きに係る所少かつまり、要に言詞の配置といふもの、専ら散文解釈は許し難き言葉の顛倒を指す。詩歌に於ける言辞の顛倒は唯だその律呂を守るの必要に生じたるもの、少過ぎずと考ふる論者あるが、予輩の見る所にても固より詩形に欠く可らざる唯一要件は律呂の一つに外ならねば、言辞の顛倒なくも尚よく詩歌たるを得べしと思惟す。然れども其顛倒を以て詩趣に関係なきものと云はず、是れ亦非なり。如何に譬喩を強むる等の修辞上の方便となれはとて散文に於ては餘くに通常の句法を顛倒するを許さず、又假ひそれを許すとあるも、是れ概ね其文の詩歌に近づきたる所に於いてのみ。固より全く想に関係する所なくして徒らに辞句を顛倒せしむるは拙き詩人の為す所なるが、

早稲田大学出版部原稿紙

若し此點に用意あらば、辭句の歌例はあいて活歌表出の一方便となし得べし。此理に就きては予輩は二、三に深く究むることを欲せず、但だ我が現今の形辭法には今一層言辞の歌例を容すの餘地あらんと云ふことに躊躇せず、又是れを以て上に云ふ今様ふりの辭を移す一方便となし得ることを疑はず。

散文に於ては置かむる可うむる語尾も詩歌に於いては之を異し得るのみならず、都つて之を異しとする方(殊に我が形辭法に於ては)其詩趣をなすの一助となるとあり。「あらぬなり」と云ふが如き語を以て尾れる句の飜訳如きは、是れ多くの形辭法に見る所の辭なり。我が語法に於ては右詞を以て尾りて十分意の通ずるのみならず、また、詩句としては却つて斯くすることの適当なることを見る。今の形辭法の中、言辞の配置と句尾の調へ方とを以て能く今様の辭を変れたる例なきにあらず。

今様の辭を叙ふの道には節を切ることと言辞の配置と句尾の調へ方との外に、律呂を変ずしむることあり。此最後の一方は形辭法に取りての最大問題なり。七五若くは五七の外なく我が国詩の律呂となすべきものあるか、如何は就きては富

て卿か早稲田文學第四十九號及五十號に論じたるをあらしが、是小書き詩人ならぬ者の決定し得べき問題ならねば、但だ件の早稲田文學の論文の結末にいへる如く五と七とが我国詩の主なる律格なるには相違なけれど、五文字又は七文字以外の句を挿みて差支あるべきにあらず、只だその挿み様とて彩詩人の解釈すべき問題ならむ、又假令五文字七文字以外の句を用ひずとするも、彩詩形を作るに最も手近くして又最も効用ある一方法は五と七とをきまぐれに(但し乱雑ならぬ程に)交錯使用するにあるべしと云ふだけのをは、て、に断言するも亦可なからん。

以上は我が文学上の一大彩詩業として彩詩脈の興起を催し、施いて聊か其詩形の論に亦いた及びたるなり。

彩脈詩を興すと共に今日の文学者并語学者の一大彩詩業と為すべきは、上に云へるごとく、普通散文脈の改良なり。此改良に志ある人者は大に思い切り所なくんばあらず。然るに今の所謂文学者は餘りに中古文若しくは地方文学の模範に志ある所はなきか。而して以て発達せしむべきは、方の所謂文章にあらずして盛ん実際世間に話さるゝ活言語にあるあらずや。語ちは俗語のそのまゝ、談話体の

早稲田大學出版部原稿紙

えのおゝを以て文章となせと云ふにあらず。俗語は標準語と見るべき文章なり人は其外の彫琢を歴ふる可らず。而も将来の国文学の発達を思はゞ、取って以て彫琢すべきは今日用ひらるゝ所謂文章語にあらずして活言語にあらずや。予輩は逆に言へば一話論を以て根據なき一妄想となす能はず。予輩は我が文章語をして今一層活言語に近からしむるの必要を感じてこまるなり。文章語をして活言語に近からしむと云ふ人あるも、毎日活言語をして文章語に近からしむるのうしも、と云はんか、好文学の当に取るべき方針なるべし。

談話語を彫琢して文章語となさんには其語尾をいかにすべきやと云ふかもしれず。固より一類問題なれども、若し今日の文学者が標準語養成の必要を認めて協力する所あらんには、其成績は遠からずして大に挙がらん。若し夫今有力なる二三文学者にして、以て発心して一話協同刻苦勉励せば、文界の気運は必ずや一転歩を為すに至らん。美文若しくは文章なるものに関する一種の迷信を掃除して生命を活言語に求め得べき好文脈の創めらるゝに至らば、国文学興隆の大基礎はこゝに開けたりと云ふを得べし。

早稲田大學出版部原稿紙

いでも文章として一種の妙趣と活動（慣用の文章語に於いては得可らざるもの）を具ふるを見ば、大天才を有するの士が工夫鍛錬を盡すに依り、新漢文の妙所も具へ而して活言語の自在活動を保有する一新文體の創始せらるゝ事なしと云ふの理あらんや。吾輩は今日の文學者が此の我が文學上の大事業に深く注意せんことを切望して止まざるなり。

（明治二十八年三月五日發行 太陽第一巻第三號）

雜篇

[illegible] スピノーザの性行

てと——を　所——處
我が——我　若しは——若しくは——若くは
む——ん　もの——者
此の——此　其の——其　等ふ
[illegible]

昭和十年十月九日　望月世教謄寫

早稲田大學出版部原稿紙